第 6 回学習院大学身体表象文化学会大会

研究発表要旨集

日時：2022 年 7 月 2 日
於：オンライン開催（Zoom）

《プログラム》

第一部：研究発表（発表：25 分 質疑応答：10 分）

- 研究発表 1（13:35–14:10）
  『マリア様がみてる』と百合の受容——二次創作から考える
  田原 康夫（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程）
- 研究発表 2（14:10–14:45）
  今敏『PERFECT BLUE』におけるアイドルの表象
  胡 唯伊（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士前期課程）

14:45–15:00 休憩

第二部：研究発表パネル（15:00–16:30）

司会：岡田尚文（学習院大学ほか非常勤講師）

① 15:00–15:20
ゾンビと戦争をめぐる思想史的考察——ホッブズ、ルソー、ロメロ
中里 昌平（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程）

② 15:20–15:40
リビング・デッドとダイング・サバイバー
野田 謙介（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程単位取得退学）

③ 15:40–16:00 ゾンビ集団と〈女ゾンビ〉
芹澤 円（神戸大学大学院国際文化学研究科助教）

④ 16:00–16:30 全体討議

16:30 閉会

発表 1:『マリア様がみてる』と百合の受容――二次創作から考える

発表：田原康夫（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程）
司会：斎藤宣彦（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程）

要旨

「マリア様がみてる」は今野緒雪による小説作品である。1999 年に第一作が少女小説レーベル「コバルト文庫」（集英社）に書き下ろされて以降、本シリーズは「マリみて」の愛称とともに性別や年齢をこえて幅広い読者に支持されてきた。反響の大きさをきっかけに、女性同士の親密な関係性に熱狂するファン層が見出されたこともあり、本作は現在に至る「百合（またはガールズラブ）」ジャンルの流行の端緒と位置付けられてもいる。

従来、このようなファンの出現は先行するジャンルであるボーイズラブ（BL）との類比で理解されてきた。すなわち、異性愛の物語では描きにくいとされる対等かつ親密な関係性が希求されたからこそ、女性同士の関係を描く「マリア様がみてる」や百合ジャンルが支持されたというのだ。

しかし、このような理解はボーイズラブに関する既存の知見に基づく類推に留まるものではないだろうか。百合の受容プロセスをより具体的に分析する余地は残されている。

以上の問題意識に基づき、本発表では「マリア様がみてる」の受容の実態を解明すべく、コミックマーケットでの「二次創作」活動に注目する。カタログに掲載された二次創作作品のメタデータを集計することで、物語性が重視されるボーイズラブジャンルの二次創作とは異なる「マリみて」ファンの嗜好を明らかにする。

発表２：今敏『PERFECT BLUE』におけるアイドルの表象――アイドルから女優への転身をめぐって

発表：胡唯伊（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化専攻博士前期課程）
司会：中田真梨子（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程）

要旨

日本のアニメーション監督、今敏（1963–2010）の『PERFECT BLUE』（1997）は、ナラティブ論や視線論など、さまざまな観点から研究されているが、身体イメージの分裂・二重化に関する物語の主題と、実像と虚像をめぐるアイドルのイメージ分析とを結びつける研究は管見の限りない。しかし、この関係性が本作において重要である。

本作は主人公・未麻のアイドルから女優への転身をめぐる心理的葛藤を描いた物語である。アイドルから女優への移行が上手く行かずに悩む未麻の前に、アイドルの姿をした未麻の幻影が鏡面に現れるが、この出現が絶えず分裂・二重化に晒されるアイドルのイメージと深く関連することを本発表では指摘する。また、未麻はレイプシーンの撮影という通過儀礼を経て、アイドルに戻れず、本物の女優にもなれない両義的な状態と化す。最終的には、アイドルとしての未麻を装うマネージャーとの闘争を通して、未麻の幻影を象徴的に殺害し、その幻影と未麻自身を徹底的に分離させることに成功する。このような分身の物語がやはりアイドルのイメージ生産のメカニズムと関係していることも本発表では示す。

そのために、まず 90 年代当時の日本のアイドルに関する時代背景やその定義を論じ、分析する。その上で、上に述べた本作におけるアイドルから女優への転身過程と、アイドルを成立させる構造との関係を通過儀礼に関する研究へ結びつけて分析することで、今敏が創作したアイドル像について考察する。

研究発表パネル:「ゾンビーズ、アセンブル！」ステートメント(岡田尚文)

ゾンビとは、〈リビング・デッド（生ける屍)〉や〈ウォーキング・デッド（歩く屍)〉のような「形容矛盾」によってしばしば言い換えられることからも分かるように、実のところ、生と死、主体と客体、自己と他者、動と静、男と女といった様々な既存の二項対立的思考を失効させる未決定ないし非決定状態の謂いである。そうであるならば、「我々（人間）はゾンビではない」と言い募るよりは、「我々がゾンビになる（かもしれない)」、「我々はゾンビに似ている（かもしれない)」という認識の地平から、いま一度、フィクションにおける具体的なゾンビ的表象、延いては集団としてのゾンビ=我々の身体のあり様を検討してみてはどうだろうか。そのとき、「ゾンビども、集まれ！」という呼びかけは、もはやキャプテン・アメリカのような一人の力強いリーダーが掛ける号令足りえず、既に半ば以上ゾンビと化した我々自身が口々に発する、言葉未満の〈叫び〉となるだろう。

本研究発表パネルでは、各パネリストがそれぞれ戦争論（中里)、ジェンダー論（芹澤)、漫画論（野田）の立場から、主としてジョージ・A・ロメロの映画作品を参照しつつ、ゾンビ的表象によって表面化する様々な問題について論じ、それらについて参加者とともに討論する。

①ゾンビと戦争をめぐる思想史的考察――ホッブズ、ルソー、ロメロ

発表：中里昌平（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程）

要旨

ジョージ・A・ロメロ『死霊のえじき』（1985）が示したゾンビ禍（パンデミック）とは戦争状態の謂であるとの認識をひとつの画期として、『WORLD WAR Z』（2006）の著者が陸軍士官学校（ウェストポイント）で講師を務めたり、あるいは米国防総省（ペンタゴン）がゾンビ禍発生時の対策シナリオを（軍事訓練用に）作成したりと、「ゾンビ」と「戦争」は深く結びついてきた。このときゾンビはいわゆるテロとの戦いをこんにち筆頭とする非対称戦争における敵に擬され、換言すれば非対称脅威の比喩形象として現実の戦争理解に役立てられている。が、ここには実際のゾンビ映画が表象している戦争状態、またそこにおけるゾンビそれ自身の敵としての性格を吟味するといった視点が欠けているといわざるをえない。

そこで本発表は、ゾンビ映画の（ポスト）黙示録的フィクションとしての性質を考慮し、戦争状態にかんする検討はもとより自然状態を仮構することで社会成立の起源やその理由を考察した契約説の思想家ふたり、すなわちホッブズとルソーの戦争観をまずは導きの糸とすることでそれらを分析する。加えて、カール・シュミットの例外状態論やパルチザン分析も援用することで「敵の思想史」ともいえる戦争思想史を展望し、そこにゾンビもまた位置づける一方で、これらとはまったく異なる戦争論としてあるピエール・クラストルの「戦争の考古学」にも言及し、ゾンビ禍が「社会に抗する自然」であることを指摘する。そして最後に、ロメロのゾンビ映画にふたたび注目し、以上の考察からも易々と逸脱し超出するゾンビのその動態性にあらためて驚きたい。

②リビング・デッドとダイング・サバイバー

発表：野田謙介（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程単位取得退学）

要旨

もし仮に、ジョージ・A・ロメロに倣って「生きているが死んでいる存在」をリビング・デッドとよぶならば、その対となる「死んでいるが生きている存在」は、どのように名づけられうるだろうか。

中沢啓治『はだしのゲン』（1973）がその答えのひとつをあたえてくれる。自らもヒロシマの被爆者であった中沢は、原子爆弾の光を浴びたあとですでに死んでいることに気づかず歩きまわる 生存者（サバイバー） たちを、強烈なゾンビ的イメージでもって描きだした。彼らは「リビング（生）・デッド（死者）」ではなく、「ダイング（死）・サバイバー（生存者）」であった。

両者の近さはその図像的類縁性のみに起因するのではない。なぜならば、前世紀末、いくつものアポカリプスがしばしばダイング・サバイバーたちとともに語られたのにたいし、21世紀に入ってその舞台を用意したのはむしろリビング・デッドたちであったといえるからだ。

ジョージ・A・ロメロによる映画『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』（1968）は、そのような新世紀におけるリビング・デッドたちの跋扈を先触れするものであった。その一方で、こうの史代によるマンガ『夕凪の街 桜の国』（2004）は、核戦争のダイング・サバイバーたちがすがたを消したかのように見える時代に描かれる。本発表では、両作品をとりわけそのラストシーンに着目し、彼らを物語る（語り終える）ことの意味について考察する。

③ゾンビ集団と〈女ゾンビ〉

発表者：芹澤円（神戸大学大学院国際文化学研究科助教）

要旨

ゾンビの集団とはどのようなものだろうか。Vinney and Wiley-Rapoport（2016）は、ゾンビ集団は内部での優劣がなく組織化もされていないと特徴づけ、さらにはお互い同士見分けがつかないので、ジェンダーのような社会構造もゾンビにとっては重要ではないと述べている。しかしながら、ゾンビ映画においてゾンビを演じる俳優は女性・男性という社会的な性差から逃れることができないのも事実である。そこで本発表ではロメロ前期３部作を対象とし、ゾンビ集団における〈女ゾンビ〉に焦点を当て、映画の中で〈女ゾンビ〉がどのように扱われているのかを分析し、考察することを目的とする。

例えば１作目の『ナイト・オブ・ザ・リビング・デッド』では、登場する〈女ゾンビ〉の数は〈男ゾンビ〉よりも少ない。また、襲来する〈女ゾンビ〉が素手であるのに対し、〈男ゾンビ〉は石や木の棒などを手にして家などに押し入ろうとする。このような違いから、平等であるとされるゾンビ集団にもジェンダー差が付与されていることを明らかにしていく。